陣地を再び形成するパレスチナ

〝闘えば必ず生きて出会える〟
かえって楽天的になった人々

アラブからの手紙　日本赤軍

〔一〕

なつかしいみなさん、元気ですか？　レバノンはまだ苦悩の中にあります。

そして、侵略・破壊・虐殺を経ながらも尚、侵略・破壊、そして虐殺の挑戦を受けつづけています。レバノンへの侵略が始まった時から、もう一年目を迎えようとしているのに。

しかし、不思議なくらいに、パレスチナ革命もそして反帝勢力も、したたかな力を養い、陣地を再び形成し、新しい戦場に陣取って、帰還の歌を声高らかにうたっています。ベイルートで、レバノンで失った数千人の命のかわりに、新しい闘いがまた、数千人の命を招請しています。

もしも闘わなかったとしたら、この楽天性も、この確信も、ここに存在していないでしょう。敗れたけれども、力の限り闘ったという自信、闘ったが故に、ひとつ利口になったという確信が、新しい闘志をかりたてています。

それらはむしろ、侵略を受け、ベイルートを包囲された〝絶望〟の瞬間から、敵の意図に反して人々はこぞって不退転の決意――あれこれの政治技術や、あれこれの論議や、あれこれの幻想を捨てさった――に立ったような気がします。敵の力己の力、この現実に対して謙虚に直視する時、だれのせいでもなく、だれの力でもなく、自分たちの力に依存したのでしょう。それ故に、共通の運命にある人々への共感を土台とする、一つの敵への結束した力となって、戦士も、市民も、老人も子供も闘いました。このベイルートの経験、一個の命を救うために万人が力を尽くし、万人のために一個の命をいとわないこの街中にあふれる人間の尊厳を何と形容したら良いでしょう。敵は絶望と恐怖のためにうちひしがれるベイルートを夢想して封鎖し、兵糧攻めにし、包囲を強めれば強める程その効果があると信じていました。

「ベイルートを守り闘う人がいる。私らがこうやって留まることが、若者への支援であり、闘いなのだ」と、砲撃のおちる部屋にとどまる老婆は、いつもかわらぬ手つきでコーヒーを入れていました。

私たちも、そんな風なのです。なつかしいあなたたちのあらゆるかたちの支援、心配は、様々なアンテナを通して私たちに伝わり、どんなに勇気づけられたかしれません。

そして私たちは、ベイルートの闘いを通して、これまでよりも闘える気がしています。新しい戦場、新しい条件での、様々な困難はあります。けれども、闘えば必ず生きて出会えるという確信が私たちを、もっと自由にしています。

だから、そんな戦場へ、あなたが訪れることは、この戦場にとっても、日本の闘いにとってもきっと積極的な役割を果たすと思います。

〔二〕

今、敵は、中東の封じ込めをバネに、ヨーロッパの保守政権を強化することによって、核配備の布陣をしき、レーガン節のプロパガンダの為にのみ、軍縮交渉の場を利用しています。中東で奪われた武器は、ニカラグアエルサルバドルの兄弟を圧殺する為に、アメリカイスラエルによってもちこまれています。米帝はソ連の動きを封じながら局地戦を挑み、分断し、世界の闘いの根拠地を一つ一つ圧殺しています。その中で、瞬太平洋をむすぶ東アジアのとりではもっとも順調に、その布陣の強固な一翼をになっています。そして、世界的規模で、緊張は極限まで高められ、局地戦、地下戦争は、激化・拡大しています。

この強いられた八三年国際決戦は、闘うことによってのみきりひらきうると、レバノンで闘った人々は考えています。ヨーロッパの戦士は、〝市民戦争〟を決意しています。中東もまた、偵察飛行と砲撃戦の挑発が日夜散発的に続き、戦争は、反帝勢力のぎりぎりの対じによって、かろうじておしとどめられています。ベイルート米大使館爆破は、こうした人々のささやかな警告として放たれた一つの戦闘行為にすぎません。それらは、より広く、深く、持続的な反米闘争としてくりひろげられている闘いの一歩であるといえましょう。レーガンの戦争政策がふりまく局地戦による革命の圧殺に対し、世界のどの地域における反米闘争もまた、敵に打撃を与え、味方の共感と力を拡大するでしょう。

この時代にあって、反米闘争の直接行動こそが平和の実現の道であり、国際的な人民連帯の道であり、反帝統一戦線の拡大の一歩を実現するでしょう。

平和的手段、暴力的手段、あらゆる創意に色どられた反米直接行動の国際連帯によって、米国人民のベトナム反戦を越える勇気ある決意を再び求め、戦争政策を終らせなければならないと思います。それは日本でも同様に問われています。

〔三〕

十年以上も過ごした街を失い、それなのに、闘いが、もっと好きになったといったら、あなたたちは笑うかもしれませんね。「日本の闘いは困難であり、君たちは日本に居ないから勝手なことを言える」と言うでしょうね。「十年前とちがうんだ」と言うでしょうね。

〝十年前とちがっているのは状況、いわば客観でかわっていないのが、あなたたちだ〟と言ったら怒るかもしれない。でも外から見る日本は、そんな風に見えます。

情況はより反動化し、悪化しています。ブルジョアジーは、七〇年に入って産業構造の転換を計り、二十一世紀に生きる手だてをつかみとり、先端技術産業への重点化とそれにみあった支配体系をととのえようとしています。

それなのに味方は、闘いに対する考え方において、かわっていないから敗けつづけているのではないかと思うのです。勝てるという確信を自分がもたないで、人がどうして一緒にやろうと思うでしょう。

長年の闘いの結果、たいした玉でない人々で革命をやっていることもわかりもした。この人は、すごいかもしれない。この人は、いけるかもしれない。自分は、すごいかもしれない。それらは幻想でなくて何だったでしょう。そして逆に言えば、そうした（たいした玉でない）人々が、あたり前に力を合わせ、人間的共感・きずなをむすび、その信頼の上に、やるだけのことはやろうという風に闘わないと、勝てないのではないかと思うのです。

マルクスやレーニンの言ったことに合致しているか否かで争うことも、マルクスの葬送を語ることも、同じように駄足で、唯、何の為にだれが、なにに、どう勝つのか、と本質論は、ますます現実変革の障害物になっていくように思います。

今、十年余の流れをふりかえり、物質的に貧しく、しかし、希望と決意にみちた去年の闘いをふりかえり、やはり勝てるなと思うのです。ここで勝てることはまた、日本でも勝てそうなやり方があるのではないかと、私たちの夢想をかりたてます。だから、闘いの出会いのために、もう一度共に戦闘的隊列をうちきたえるために会いたいと思います。

私たちのところは、地図にない草原の真中あたりです。けれども、あなたが決断して訪れるならば、どこからでも到達できる地点にあります。

八〇年代の激しい流動にそなえて、お互いの智恵をもちより、〝たいした玉でない〟私たちと、〝たいした玉でない〟あなたたちが共に考え、戦術を駆使し、勝つために努力すれば、なんとかなりそうな気がします。私たちの革命に対する確信は、「まちがわない」ということにあるのではなく、「まちがっても必ず正していける」という確信なのですから。

共に闘うために、戦場はいつも開放されています。

元気で、また。

一九八三年五月三〇日

ということから考えれば良いような気がします。勝つ為に考える時、しらずしらず、やはり、昔の先達の真理にかえっていく筈だと思うからです。頭をもっと自由にして考えた方が良いと思うのです。

勝てるように闘うためには、格調高いレーニン調よりも、日本の風土・人民にあったものの方がいいと思うのです。「洗練された言葉よりも、孤立感を補う共感がほしい」「人間的な信頼、きずながほしい」というあたり前の気持を、宗教や、労務管理に吸収されている現実を直視せず、〝プロレタリアート〟を語る時、